

‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις ὁ βίος, ὑπόληψις.’

90号 1994.7.28

文・編集・発行
恋 怪子

CD: LENINGRAD COWBOYS “HAPPY TOGETHER”



7月7日。待望の「レニングラード・カウボーイズ、モーゼに会う」を観た。映像も地味で演奏もまあまあというくらいだったが、同時上映のレニングラード・カウボーイズと旧ソ連の軍楽隊レッド・アーミー・アンサンブルとの共演ライブのドキュメンタリー映画「トータル・バラライカ・ショー」は圧巻、感動的だった。詳しいことは右に載せた高橋健太郎氏のCDの解説を読んでもらうとして、旧ソ連の軍楽隊の人たちが軍服姿で楽譜を見ながらレニングラード・カウボーイズと一緒にローリング・ストーンズの「IT'S ONLY ROCK N' ROLL」やボブ・ディランの「KNOCKIN' ON THE HEAVEN'S DOOR」をやっているのを見ると、世界の動きや変化は私たち一人一人の人間に密接に関係するのだということがよくわかる。そういう変化を国家や政治のレヴェルで理解することもできるし、そのように語られることが多いのだけれど、このライブの映画を観ると世界の変化を具体的に実感できる。そして、音楽がどういふふうにと人と人をつなぐのかということもよくわかる。

「モーゼに会う」は「ゴー・アメリカ」のメンバーの半分が死んだという設定になっているけれど、実際のメンバーも5年前とはほとんど入れ替わっているらしいこともこのライブ映画を観てわかった。

LIVE: Dr. WOLF 1994.5.16 新宿アンティノック

煙草の吸殻がいくつか、紙コップがいくつか、つぶれたビールの空き缶がいくつか、白と黒の市松模様の汚い床に散らばっていた。客はまばらでガランとしていた。ひんやりしていた。Dr. WOLFの4人がステージに現れ、ギターが、ドラムが、ベースが、そして歌が…。ああ、これがDr. WOLFの最後の夜…。

崩れそうなボロボロのコンクリートビルディング入口はないぜ
まばたきする蛍光灯に照らされる 2階のフロアさ いちばん奥の扉を開く

「Dear SILVER WOLF」で開いた最後の夜の扉が閉じられてしまうまで、目を、耳を、心を凝らして、Dr. WOLFをこの最後の夜に封じ込め、月のない夜の光にするの。

SILVER WOLFが現れる三日月の綺麗な晩に
君の知らない路地裏から SILVERのMiniに乗って…
そこは月の光が銀色に輝く静寂な夜。黄金の朝がけて訪れてこない夜。あの夜、無数の粒子となって宇宙に漂い出た音楽を呼び戻したければウォークマンのスイッチをオンにすればいい。そして「Dear SILVER WOLF」が聴こえてくれば、白と黒の市松模様の床が、ガランとした静けさが、リゼントをきめたDr. WOLFの4人が、幻視えてくる。

HEY! SILVER WOLF…夢の続きを見させてくれよ
Happy Endのヤツを
今度君に会うことができたらくさん話したいことがあるんだ
そして2人で素敵なメロディーを…
SILVER WOLFが現れる銀色の車に乗って
いつものあの歌をこぼまさせて
オレは歌うよ誰のためでもなく
オレは歌うよこの気持ちのまま Dear SILVER WOLF…

(words by MASAYUKI YAMADA)

テープにはいつも終りがきてしまうけれど、あの最後の夜に、月の見えない街に落ちていった4人のすてきな優しい笑顔のさよならが、いつも涙のレンズを通して幻視えるから、終りはいつもHappy Endなの。

映画「レニングラード・カウボーイズ・ゴー・アメリカ」は、旧ソ連出身のレニングラード・カウボーイズというバンドが、悪徳マネージャーにそそのかされてアメリカに渡り、仕事を求めて各地を旅行しながら、その土地の音楽を演奏することになる。そして、最後には彼らはメキシコに辿り着いて、ウェディング・バンドとして成功するというストーリーだった。

「レニングラード・カウボーイズ、モーゼに会う」は、その結末あたり、ストーリーはメキシコからスタート。しかし、前作とは違って、雰囲気はかなり暗い。メンバーの半数はメキシコで死に、残ったメンバーは望郷の念にとらわれる。そして、モーゼに出会った彼らは大西洋を渡り、ヨーロッパへ。そこで、なぜか残ったメンバーと再会し、ヨーロッパを模索しつつ、故郷のロシアをめざす。前作同様、ロード・ムービー形式で撮影された映画だが、今回は舞台をアメリカからヨーロッパに移し、昨今の激動するヨーロッパ情勢も強い影を落とした内容になっている。

考えてみれば、前作完成後の数年間にソ連が崩壊し、東西ヨーロッパの壁も消滅した。この変化はアキ・カウリスマキやレニングラード・カウボーイズにとっても、巨大な衝撃を伴うものであったに違いない。思えば、レニングラード・カウボーイズが名前を取ったレニングラードという都市も、もはや地図の上からは消えてしまっているのだ。「レニングラード・カウボーイズ、モーゼに会う」の持っているメランコリックかつアイロニカルなトーンは、そうしたことも無関係ではないだろう。

それと同じように、このレニングラード・カウボーイズの新作アルバム「ハッピー・トゥギャザー」も昨今のヨーロッパ情勢の変化を抜きにしては、語ることはできない内容だ。というのも、このアルバムは旧ソ連のレッド・アーミー・アンサンブルをゲストに迎えたアルバムなのだ。そして、「レニングラード・カウボーイズ、モーゼに会う」とは対照的に、こちらは明るいユーモアに満ち満ちたプロジェクトでもある。

フィンランドのロック・グループと、旧ソ連の軍楽隊の共演。こんなとてつもないアイデアが実現できたことにまずは驚くが、実は両者の共演はこのアルバムのレコーディングが初めてではない。というのは、両者は1993年の6月13日にヘルシンキで一編にコンサートを行っているのだ。

このコンサートは「トータル・バラライカ・ショー」と名づけられ、ヘルシンキのセント・スクエアになんと7万人もの観衆を集めて行われた。ステージに上ったのは総勢100人近いレッド・アーミー・アンサンブルと総勢11人のレニングラード・カウボーイズ。そして、その模様は同名のライブ・アルバムとア

キ・カウリスマキ監督によるドキュメンタリー映画によって、記録されている。僕は今年のベルリン映画祭でドキュメンタリー映画を観てきたが、それはもう、信じられないような光景の連続だった。

そもそも、フィンランドという国は旧ソ連からの巨大なプレッシャーを受け続けてきた国だった。そのフィンランドのロック・グループ、それも旧ソ連の軍楽隊をコスチュームにした風変わりな集団が、本物のレッド・アーミー・アンサンブルとともに、ロックンロールのカヴァーを次々に演奏していった。このコンサートに7万人もの人々が集まったのも、フィンランドの人々にとって、それがいかに強烈な出来事であったかを物語っているだろう。

レニングラード・カウボーイズによれば、レッド・アーミー・アンサンブルとの共演は、そもそもビールを飲んでいる時に誰かが書いた出来事だったという。しかし、彼らはそのクレイジーなアイデアを実現させてしまった。その舞台裏にはさっと数多くのエピソードがあったに違いないが、リハーサルを始めてからは、ミュージシャン同士のコミュニケーションはさきわめてスムーズだったという。

というわけで、その「トータル・バラライカ・ショー」での共演の後、レニングラード・カウボーイズとレッド・アーミー・アンサンブルがあらためてスタジオでレコーディングしたのが、この「ハッピー・トゥギャザー」ということになる。ライブ・アルバム「トータル・バラライカ・ショー」は2曲入り、CD2枚組のライブ・アルバムだったが、この「ハッピー・トゥギャザー」はその主要な収録曲をあらためて録音し直した内容と言ってもいい。

レニングラード・カウボーイズはもともと奇抜な選曲によるカヴァーを得意としているグループだが、このアルバムに収められているのはすべて有名なロックやポップスのカヴァー曲だ。ボブ・ディランの「天国の扉」、レッド・ツェッペリンの「天国への階段」、タートルズの「ハッピー・トゥギャザー」、ビーチ・ボーイズの「カリフォルニア・ガール」、ZZトップの「ギミ・オール・ユア・ラヴィン」、トム・ジョーンズの「デライラ」、マーサ&ザファンデラスの「ダンシング・マイ・サトリー」、レイナード・スキナードの「スイート・ホーム・アラバマ」、キャンド・ビートの「レッツ・ワーク・トゥギャザー」、ヒートルズの「イエロー・サブマリナー」、ローリング・ストーンズの「イツ・オンリー・ロックンロール」などなど。この解説原稿はまだ正式なマスター・テープが到着する前のラフ・カセットをもとに書いているので、曲順などは前後していると思うが、このアルバムに収められているのは、そんな誰も知らない有名なカヴァー曲ばかりだ。

これらのカヴァー曲の中にはレニングラード・カウボーイズが以前から演奏していた曲も含まれているが、いずれもレッド・アーミー・アンサンブルとの共演のために、新しいユニークなアレンジを凝らしている。さらには「デライラ」や「ハッピー・トゥギャザー」や「イエロー・サブマリナー」のように、レッド・アーミー・クワイアのテール歌手が担当したりリード・ヴォーカルを聞かせる曲もある。オーケストラ・アレンジメントを担当しているのはカウボーイズのメンバー自身で、これは相当なハード・ワークだったに違いない。

だが、濃厚かつ壮大なレッド・アーミー・アンサンブルのオーケストラ・アレンジとコーラスをユーモラスに使いこなしていくアレンジメントは、まさにレニングラード・カウボーイズの面目躍如。仕上がりは痛快このうえない。旧ソ連軍楽隊が「スイート・ホーム・アラバマ」なんていう曲を演奏するなんて、一体、誰が考えたのだろうか。そのことだけを取ってみても、レニングラード・カウボーイズが人に食ったアイデアを持った連中か分かるというものだ。

この1994年にはレニングラード・カウボーイズは再びレッド・アーミー・アンサンブルとともにベルリンでコンサートを行うという。東西を隔てる壁の消えたベルリンで、両者が共演するというのも象徴的な出来事になることだろう。そんな話題も含めて、今年はレニングラード・カウボーイズが快進撃を遂げる年になりそうだ。

1994年4月23日 高橋健太郎

MOVIE: "MEET MOSES"



POEM: Masayuki Yamada 「ボクの脳波」

「ボクの脳波」
「楽しさは2種類」

「ボクの脳波」
ゆっくりとメカの中に入って行く。初めての経験だ。人間ドックみたいだけど…。X線？赤外線？なんだかわからんがオレの体の中身が写真に写しだされた。骨はあるぞ。だが脳波に異常?!があるらしい。

「この脳波はふだんは波打ち際の波のように静かに揺れているが、突然、なんの前ぶれもなく高さ90mの大波となって君の体すべてを飲み込んでしまう。一度その波に襲われたら一生波は静まらない」とドクターは言う。それを治す薬はないらしい。

「ドクター…あなたはもしかしてDr. WOLF?」
そんなわけないか。
「とりあえず君に必要なものは、ノートとペンとギターと、時間といくらのお金と、そして君を愛してくれている人を優しく包む心だ」とドクターは言った。
「ドクター、あなたはやっぱり…」
そんなわけないか。

Masayuki Yamada

楽しさから選んでいるような気がする。そんなはずはないのに…。楽しいかって？楽しいってうか、やっぱり少し苦しい。でも、ボクが今言っているのはそれ以外の楽しさってことさ。川ですっ裸になって泳げる日はいつだろう？そんなこといつでもできるぜ…。いつでもできそうなことは一生できないような気がする。今、何をすべきなのか？ってことから解放されたときは、やっぱり楽しい。ホッとすると…。でもそれは長くは続かない。だって、一生できないようなことをぶだんやろうとしているから。

これは「Dr. WOLFの夢の続き」というタイトルでMidnight press vol.18に載せたものです。